

2016年10月20日／浪宏友ビジネス縁起観塾／

## 智慧と人生

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄著『阿含經典2』ちくま学芸文庫／実践の方法（道）に関する經典群／道相應／1無智(p.161)、諦相應／9無明(p.296)、10明(p.297)

#### (2) 主題

「無明」と「明」について、学びたいと思います。

### 2. 人間がもつ三つの性質

経文に入る前に、人間が持つ三つの性質に触れておきたいと思います。

- ・人間は、自分のしたことを見て、自分はこういうことをする人間だと認識します。
- ・人間は、自分のしたことは正しいと思います。
- ・人間には、したことはしやすくなるという性質があります。

こうした性質によって、人間は向上もしますし、退歩もします。これらは、人間性形成に深く関わる性質であると言えます。

### 3. 無明と無慚・無愧

#### (1) 経文

「かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。その時、世尊は、もろもろの比丘たちに告げていった。

『比丘たちよ』

『大徳よ』

と、比丘たちは世尊にこたえた。世尊は説いていった。

『比丘たちよ、無明まずありて、よからぬことどもの生ずれば、それにしたがって無慙(むざん)

- ・無愧(むぎ)のことどもが生ずるのである』」（増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p.161）

#### (2) 無明とは

「明(みょう)」は「智慧」ですから、「無明」は「無智」ということになります。

「無明まずありて、よからぬことどもの生ずれば」とあります。「よからぬこと」とは真理から外れた行為であり、自分を傷つけ、他人に迷惑をかけるようなことをしてしまうことでしょう。

しかし、無明であるために、そのことが分からず、無慚・無愧が生じるのです。

(3) 無慚・無愧

① 現代用語の「慚愧(ざんき)」は「恥ずかしく思うこと、心に深く恥じること」です。他人に迷惑をかけたとき「慚愧に耐えられません」と謝罪することがあります。

② 仏教でも「慚愧(ざんき)」は「恥じ入ること」です。

「慚(ざん)」は「他から非難されるべきことを自ら恥じること」で、「自分はこんなことをしてしまった。人間として恥ずかしい」と思うことです。

「愧(ぎ)」は「他から非難されるべきことを他に対して恥じること」で、「自分はこんなことをしてしまった。世間に対して恥ずかしい」と思うことです。

③ ここから「無慚(むざん)」は「非難されるべきことを自ら恥じないこと」、「無愧(むぎ)」は「非難されるべきことを他に対して恥じないこと」となります。

(4) 「無明」と「無慚・無愧」

「無明」な人は、真理から外れたことを平気で行ってしまいます。そして、自分はこういうことをする人間だと認識し、自分のしたことは正しいと思います。

そのために、真理から外れたことを行ないながら、人間として恥ずかしいことをしたとも思いませんし(無慚)、社会人として恥ずかしいことをしたとも思いません(無愧)。

(5) 厚顔無恥

「厚顔無恥(こうがんむち)」という言葉があります。

「無恥」とは、人間として恥ずかしいことをしているのに、恥ずかしいと思わないことです。

「厚顔」とは、恥ずべきことをしても恥ずかしいという表情を示さないことです。自分の行っていることが人間として恥ずかしいことだと気づかず、むしろ正しいと思っているのであれば、恥ずかしいという表情を示すはずもなく、かえって得意顔をすることさえあります。

3. 無智

(1) 経文

『比丘たちよ、無智まずありて、無智の者となれば、それにしたがって正しからぬ見方が生ずる。

正しからぬ見方が生ずれば、それにしたがって正しからぬ思いが生ずる。

正しからぬ思いが生ずれば、それにつれて正しからぬ言葉が生ずる。

正しからぬ言葉があれば、それにつれて正しからぬ行為が生ずる。

正しからぬ行為があれば、それにつれて正しからぬ生き方が生ずる。

正しからぬ生き方があれば、それにつれて正しからぬ努力が生ずる。

正しからぬ努力があれば、それにつれて正しからぬことに念いをこらす。

正しからぬことに念いをこらせば、したがって正しからぬことに心を専注することとなる』

## (2) 正しからぬ見方

「無智」とは「智慧が無い」ことです。智慧が無いとは、ものごとを四つの聖諦で見ることができないことを意味します。

このために、例えば、次のような正しからぬ見方をしてしまいます。

- ・我見（がけん）：変化しない自分、他と関係なしに存在している自分、自分の思い通りになる自分が存在するという見方。
- ・我所見（がしょけん）：あらゆるものは自分のものであるという見方。
- ・邪見（じゃけん）：原因・条件・結果・影響の原理を否定する見方。
- ・見取見（けんしゅけん）：自分の考えが最高であって他はすべて間違っているという見方。
- ・戒禁取見（かいごんしゅけん）：真理から外れた教えや決まりを正しいと思い、これを守れば幸福になれると思う見方。

## (3) 正しからぬ人間になる

正しからぬ見方から、正しからぬ行為が生じ、正しからぬ人生が生じます。

そして、正しからぬことに自分の身心を注ぎ込むこととなります。

## 4. 慚・愧

### (1) 経文

「『比丘たちよ、智慧まずありて、よきことどもが生ずれば、それにしたがって慚愧が生ずるのである』」（同書、p.162）

### (2) 慚・愧

「正しいこと」が分かるようになれば、「正しくないこと」も分かるようになります。

自分を振り返って、正しくないことをしたと自覚したときには、慚・愧が生じるのです。

### (3) 慚・愧と自燈明・法燈明

自燈明・法燈明を実践する人は、自分を「法」に照らして反省します。法から外れている自分に気づいたときは、慚・愧が生じ、自分の言葉や行動を正しくする努力をするに違いありません。

### (4) 慚・愧と懺悔

仏説観普賢菩薩行法経に、懺悔（さんげ）が説かれています。

懺悔とは、自分が過去に犯した過ちを自覚し、告白し、許しを乞うことです。仏説観普賢菩薩行法経では、告白し、許しを乞う相手は仏さまです。

仏さまを前にして、自らを反省し、慚・愧し、懺悔し、法の実践に入る。これが、私たちのような在家の修行者の、現実的な修行の道であると考えられます。

## 5. 智慧

### (1) 経文

「『比丘たちよ、智慧まずありて、智慧ある者となれば、それにしたがってまず正しい見方が生ずる。

正しい見方が生ずれば、それにしたがって正しい思いが生ずる。

正しい思いが生ずれば、それにしたがって正しい言葉が生ずる。

正しい言葉があれば、それにつれて正しい行為が生ずる。

正しい行為があれば、それにつれて正しい生き方が生ずる。

正しい生きがあれば、それにつれて正しい努力が生ずる。

正しい努力があれば、それにつれて正しいことに念いをこらすこととなる。

正しいことに念いをこらせば、したがって正しいことに心を専注するようになるのである』」

(同書、p. 162)

### (2) 正しい見方

正しい見方とは、四つの聖諦でものごとを見る見方です。

四つの聖諦でものごとを見るためには、次のことが必要です。

- ・起きていることをありのままに見て、ありのままに受け入れる。
- ・起きていることを、原因・条件・結果・影響の原理で、正しく解明し、解明したことをありのままに受け入れる。

このような姿勢で、これが苦である、これが苦の原因である、苦の原因を滅すれば苦が滅する、苦の原因を滅する道はこれであると見定めていくのです。

このようにできれば、我見・我所見・邪見・見取見・戒禁取見などの正しからぬ見方に陥ることはありません。

### (3) 正しい人間となる

正しい見方ができれば、正しい行為が生じ、正しい人生を営むことができます。

そして、正しいことに自分の身心を注ぎ込むようになります。

### (4) 正しい人間形成

自分が真理に合った行いをして、自分は真理に合ったことを行なう人だと自覚すれば、この先も真理を行なうことに心を向けるようになるでしょう。さらに、したことはしやすくなりますから、ますます真理に合った行いをするようになるでしょう。

これを繰り返せば、自然に、正しい人間形成ができると考えられます。

## 7. 一对の経文

ここに一对の経文があります。一つは「無明」と題し、もう一つは「明」と題します。いずれの経文も、次のように始まります。

「かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、ラージャガハ（王舎城）のヴェールヴァナ（竹林）なる栗鼠養餌所にましました。その時、一人の比丘があり、世尊のましますところに到り、世尊を礼拝して、その傍らに坐した。

傍らに坐したかの比丘は、世尊に申しあげた。」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 296、297

~298)

この後、一人目の比丘は「無明」について、二人目の比丘は「明」についての質問します。

## 8. 無明

### (1) 経文

「『大徳よ、無明、無明と申しますが、いったい、いかなるを無明となすのでありましょうか。また、いかにあれば無明に陥るといのでありましょうか』

『比丘よ、苦についての無智、苦の生起についての無智、苦の滅尽についての無智、および、苦の滅尽にいたる道についての無智、これらを名づけて無明となす。そして、かくのごとくなるを、無明に陥るとはいうのである。』」（同書、p. 297）

### (2) 釈迦牟尼世尊と比丘の対話

阿含経には、比丘と釈迦牟尼世尊が親しく対話する場面が数多く現れます。釈迦牟尼世尊は、教化の手法として対話を重視されていたようです。

疑問が生じた比丘は、遠慮なく釈迦牟尼世尊に質問し、釈迦牟尼世尊は丁寧に質問に答えて、正しい理解に導こうとしています。

### (3) 「無明」と「無明に陥る」について

比丘が「無明とは何か、なぜ無明に陥るのか」と質問します。

これに対して、釈迦牟尼世尊は、無明とは、次の四つの無智であり、これらの四つの無智になることを、無明に陥るといのだと答えます。

「苦についての無智」

「苦の生起についての無智」

「苦の滅尽についての無智」

「苦の滅尽にいたる道についての無智」

### (4) 無智とは

これは、四つの聖諦を知らないあるいはマスターしていないということです。四つの聖諦を知らず、マスターしていなければ、いつまでたっても無明なのです。

## 9. 明

## (1) 経文

「『大徳よ、明、明と申しますが、いったい、いかなるを明となすのでありましょうか。また、いかにすれば、明にいたるといのでありましょうか。』

『比丘よ、苦についての智、苦の生起についての智、苦の滅尽についての智、および、苦の滅尽にいたる道についての智、これを名づけて明というのである。そして、そのようになることを、明にいたるとはいうのである』」（同書、p. 298）

## (2) 「明」と「明にいたる」について

比丘が「明とは何か、どうすれば明にいたることができるのか」と質問します。

これに対して、釈迦牟尼世尊は、明とは、次の四つの智であると言います。

「苦についての智」

「苦の生起についての智」

「苦の滅尽についての智」

「苦の滅尽にいたる道についての智」

これは、四つの聖諦を知り、マスターしているということです。四つの聖諦を知り、マスターしている状態が、明なのです。

そして、四つの聖諦をマスターできるようになることが、明にいたることなのです。

## 10. 修行の勧め

「無明」と題する経文も、「明」と題する経文も、次の経文で締めくくられています。

## (1) 経文

「『だからして、比丘よ、〈こは苦なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の生起なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の滅尽なり〉と勉励するがよい。また、〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と勉励するがよいのである』」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 297、p. 298）

## (2) 修行の勧め

釈迦牟尼世尊は、無明に陥らないためにも、明にいたるためにも、四つの聖諦に勉励するのがよいと比丘たちに勧めます。

「〈こは苦なり〉と勉励するがよい」

「〈こは苦の生起なり〉と勉励するがよい」

「〈こは苦の滅尽なり〉と勉励するがよい」

「〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と勉励するがよい」

四つの聖諦をマスターするためには、これを繰り返し学び、繰り返し実践するほかありません。